きずな

文化財保護センターだより

第11号　平成６年11月１日

財団法人　岐阜県文化財保護センター

〒500 岐阜県岐阜市司町１（岐阜総合庁舎内）　TEL 058-264-1111(代)
FAX 058-264-0343

●もくじ

荒尾南遺跡の方形周溝墓……1
遺跡台帳の整備を望む……2
発掘状況……3
トピックス……6
タイムスリップ探検隊……7
センターだより……8

荒尾南遺跡の方形周溝墓

荒尾南遺跡は、大垣市檜町にある低湿地遺跡です。南調査区より、弥生時代から古墳時代にかけての方形周溝墓が部分的ですが５基確認されました。上の写真は、作業員さんに各周溝部分に立ってもらったものです。中央にある３つの方形周溝墓は、溝が重なりあっています。弥生時代前期の方形周溝墓の溝を再利用して、弥生時代後期の２つの方形周溝墓が造られています。

遺跡台帳の整備を望む

南山大学 人類学科教授
南山大学
考古資料調査保存会会長
伊藤秋男

昨年の３月に８年ほど勤めた瑞浪陶磁資料館の嘱託学芸員の職を辞することになった。この間、「嘱託学芸員なのだから、同館の研究紀要に何か論文を寄せるように」との館長の勧めもあって、瑞浪市内にある古墳の現況調査に取り組んだ。

夏は草木が生い茂って見通しがきかないので、踏査には向かない。それに、蛇に出くわしたぐらいで足がすくんでしまう私には、一番時間に余裕のある夏期には残念ながら動けない。そのうえ、週に１日ぐらいしかこの調査に当てられなかったので、古墳のほとんどを見て回るのに結局２年以上の時間が必要だった。

瑞浪市の住民でもない私は、当然瑞浪の土地に暗いから、地図を頼りにしても、山野をかけ回るのはそんなに簡単なことではない。こんな私にとって大きな助けとなったのは、瑞浪市在住の渡辺俊典氏が、昭和36年に作成された『瑞浪市古墳調書』の存在だった。手書きの地形図に、踏査された古墳や横穴が一つ一つ点で落とされ、その時の古墳の現況が詳しく記録され、あるものには当時撮影されたネガフィルムが添付されているという念の入れようである。今から30年も前に、こうした遺跡の現況調査の必要性を感じとっておられた、氏の学究的な意識に心から敬服する。

渡辺氏のこの記録があったおかげで、私の踏査が順調に進んだばかりでなく、遺跡の今日の現況とそれとの比較ができ、その大きな変わりように大いに驚いたものである。まず中央高速道の開通で何十基もの横穴が消滅している。現存していても、土砂と落葉で完全に入り口が閉ざされてしまって壁や天井が大きく崩落している横穴、崩れた石室の石材が一ヵ所に山積みされている古墳、それに渡辺氏の示されている地点に誤りなく立っているのに、墳丘がどこを探しても見当らない古墳……と、その豹変ぶりには言語に絶するものがある。

山の手入れを怠ったために山は荒れ、30年前の小径は川の流路になったり、草木でおおわれてしまったりして、私の力ではどうしても見つけ出せない古墳もある。苦労のあげくやっと見つけ出した古墳でも、道なき道を歩き回ったためもあって、再度それを探し当てることは、土地の人に案内でも乞わなければまず無理といった古墳もある。そうした古墳に限って保存状態がよく、図面化の必要を痛感する。たとえば釜戸町宿字洞田にある古墳群などは、その好例である。

この踏査で実感したことは、古墳の崩壊や遺跡の消滅は意外と早く進行し、このまま放置したら、本当に近い将来、古墳の存在すら私たちの意識から消え失せてしまわないかという危機感であった。

遺跡地図に遺跡をただ点で落とすだけでなく、その基礎資料でもある遺跡台帳をこの平成の時代にもう一度作り直す必要がある。一つ一つの遺跡の現況について、写真と観察記録におさめた詳細な遺跡台帳を作って後世に残すというプロジェクトに、市町村単位でぜひ取り組んでもらいたい。そして、こうした仕事の指導的な役割を文化財保護センターのスタッフの皆さんにぜひとも担ってもらいたいと思う。

ちなみに私の古墳踏査記録は、『瑞浪陶磁資料館研究紀要』第４号（1988）の全頁をさいて報告されている。長丁場の研究課題だったが、この研究が美濃を通る古東山道の道筋を検証する仕事につながった。自分の画に賛するようでちょっと気がひけるけれど、私にとっては私の50才台の研究のなかでも一番情熱をかたむけた仕事となった。

発　掘　状　況

■今宿遺跡（大垣市）発掘調査

平成５年12月より始まった今宿遺跡の発掘は、「きずな」第10号で紹介しました近世から現代にかけての堀田跡と中世の農耕遺構の調査を終え、現在は、古墳時代前期（約1600年前）と考えられる水田跡の調査を行っています。

現在の調査面は、表面より約2.5ｍ下にあり、中世の農耕遺構面より80cmほど下の層になります。東西約75ｍ、南北80ｍの調査区のうち、南北に走る⑧の大畦畔より東の地域が、水田跡と考えられます。この水田跡は、大畦畔・小畦畔と呼ばれる土盛りをした堤状の「あぜ」により区画されています。

(1)　水田を大きく区切る大畦畔

大畦畔は図に示すように８本検出され、規模は幅１～４ｍ、高さは約20～80cmほどです。これらの畦畔により、調査区水田域は６区画に分けられています。このうち④⑤と②⑦の大畦畔は交差する形で築かれています。中でも④の畦畔は、水路も兼ねているようで、幅３ｍ、高さ40cmと大きく、溝（幅170cm、深さ40cm）を伴っています。これは、大畦畔で区切られた水田に水を行き渡らせるようにする構造と考えられます。

(2)　小畦畔の検出

これまでの調査から、①②④の大畦畔で囲まれた区画では、さらに小畦畔と呼ばれる小規模な「あぜ」で長方形に区切られていることが確認できました。検出できた規模は高さ10cm弱、幅20cmほどですが、耕作の行われていた当時はもう少し高く作られていたと思われます。また、この小畦畔は他の区画にも広がると考えられます。

(3)　人の足跡検出

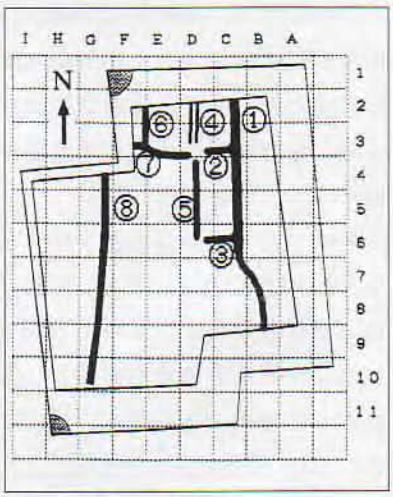
小畦畔を検出する調査の中で、多数の人の足跡が検出されました。調査区Ｄ列より東側の調査で、約2000歩余り数えることができました。特に、①の大畦畔の東側は水田面を砂の層が厚く覆い、その下の足跡がはっきりと残っています。これは、

水田跡から検出された人の足跡

この水田が河川の氾濫などにより短期間で埋まり、砂の層が、ここで耕作していた当時の人々の足跡をそのまま保護したためです。

本遺跡の調査は、現在の水田面の調査を終えたあと、さらに掘り下げ、古墳時代前期より古い時代の発掘に入ります。

もし水田跡の遺構が確認できれば、この遺跡で、4つの異なった時代の水田形態を確認できることになります。



今宿遺跡で確認された畦畔の略図

■荒尾南遺跡（大垣市）発掘調査

本遺跡は、大垣市西部の荒尾町と檜町にまたがる沖積低地にあり、調査は大垣環状線と国道21号を接続する工事予定地で行っています。現在、発掘予定区の南側半分の調査をほぼ終わっています。

(1)　方形周溝墓５基を検出

弥生時代後期の方形周溝墓（周りに溝をめぐらし方形の平面を持つ低墳丘墓）３基と、前期の方形周溝墓２基が検出されました。

確認できた5基の方形周溝墓いずれからも、土盛りした墳丘部・死者の埋葬部分（主体部）は検出されませんでした。また、今回の発掘では、調査範囲が限定されているため、5基とも部分的な確認にとどまっています。

各方形周溝墓の周溝部分より、墳丘部より転落したと考えられる土器が出土しました。これらの土器により各周溝墓を時代別に分類しますと、弥生時代前期の可能性のある3・5号墓、弥生時代後期の1・2号墓、弥生時代後期より古墳時代初頭にかけての4号墓に分けられ、埋葬時期が異なることがわかりました。このうち1・2号墓は、3号墓の溝の一部を利用して、その上に作られています。3号墓は、検出できたのが東端部分のみで、大部分は調査区外にあるため全体の形状はわかりませんが、方形の一辺が約18mとかなり大型のものです。

(2) 木製農耕用具の出土

方形周溝墓を検出した区域からは、弥生時代後期のものと推定される田下駄4点と鍬の反柄が1点出土しました。田下駄は深田などで農作業を行う時、泥の中で足が沈むのを防ぐために使用した履物です。大きさは、縦約30cm、幅約12cmで、鼻緒を通す穴と輪かんを固定する穴が設けてあります。板材はヒノキ・モミなどの針葉樹です。中には、輪かんを固定するために使用した桜の皮がそのまま残ったものもあります。反柄は鍬の刃を装着する柄の先端部分のみが出土しましたが、鍬の刃を装着する「ほぞ」があり、この「ほぞ」には刃を留める穴が2つ開けられています。堅いカシ類の材料を用い、重厚で手のこんだつくりをしています。

また、木片が集中して出土する場所からは、木製容器の一種である曲物の底板が出土しています。底板には側板をあてる位置が階段状に切り欠いてあり、側板を固定するための桜の皮の付いた穴があります。この曲物が使用された時期等は、現在検討中です。

県内で出土例の少ないこれらの木製品は、この遺跡が低湿地にあたるため、分解されやすい木質が残されていたものです。

出土している土器は約1万点で、大部分は弥生時代後期のものです。

調査区の南半分を終了した結果、住居跡は検出していませんが、狭い範囲に方形周溝墓が密集し大量の遺物が出土していることから、大規模な集落が調査区の周辺にあったことを伺い知ることができます。北側の調査区に入る今後の調査でも、多くの成果が期待できそうです。

反柄（左）と田下駄（右2点）

■岡前遺跡（吉城郡古川町）発掘調査

岡前遺跡は、吉城郡古川町杉崎地内にあり、南向きの眺望がきく高台に位置しています。

古川町内の縄文遺跡では、黒鉛入りの縄文早期押型文土器を出土している沢遺跡、方形の石囲炉が発見された御番屋敷遺跡、縄文中期から後晩期にかけての竪穴住居跡32軒検出された中野山越遺跡等があります。本遺跡は、これらの遺跡と並んで古川町の著名な縄文遺跡として知られています。

(1) 縄文時代と古代の複合遺跡

検出された主な遺構は、竪穴住居跡8軒とピットや土坑です。竪穴住居跡の時期については、出土遺物の整理・分析等をしないと詳しいことは言えませんが、縄文時代中期のものが7軒、平安時代ものが1軒と考えられます。

縄文時代のものは、直径約3～4mの円形のものが多く、いずれも中央に方形ないしは円形の石囲炉を備えています。第4号住居跡内の北西部には、扁平な石で蓋をした埋甕がありました。

また、平安時代のものは、一辺が約４ｍの方形と考えられ、北の壁側の中央にかまどを設けていたようです。

(2)　主な遺物について

主な出土遺物は、縄文時代中期中葉から後葉にかけての土器です。信州系のもの、北陸系のものが見られ、文化交流の様子が窺われます。また、黒鉛入りの縄文時代早期の押型文土器もわずかですが出土しました。石器類は、石鏃・石錐・磨製石斧・打製石斧・凹石・石皿・石錘・石匙・石棒石製装身具などが出土しました。また、接合できる土偶片も見つかりました。

縄文時代以外のものとしては、８世紀のものを中心に７世紀から９世紀にかけての須恵器が比較的多く出土しました。その他に、土錘・鉄鏃等が出土しています。

また、遺構からの出土ではありませんが、「和同開珎」が出土しています。県下での発掘調査による出土例は、不破郡関ヶ原町の不破関跡第１次発掘調査（昭和49年）での出土例がありますが、飛騨地方では初の出土になります。

今回の調査は、遺跡の南側のみと限定した発掘でしたが、この遺跡が縄文時代と古代の複合遺跡であることが確認できました。古代の遺物等については、この遺跡のすぐ南に位置し７～９世紀に栄えた杉崎廃寺との関係を、今後の整理調査の中で調べていく予定です。

岡前遺跡で出土した縄文土器と和同開珎

■牛垣内遺跡（大野郡丹生川村）発掘調査

本遺跡は、丹生川ダムが建設される折敷地五味原地区の、標高約850ｍの山間部にあります。今年度は、遺跡の約半分2,500㎡を調査します。

(1)　縄文後晩期の遺物３万点出土

遺跡はなだらかな傾斜地にあり、降雨などで流れ落ちたと考えられる多くの石や土砂に覆われていました。住居等の遺構は流出しているようですが、流れ込んだ石の間より多量の縄文時代の遺物が出土しました。出土遺物は、土器片や石器など約３万点余でした。詳しいことは整理作業の結果を待たねばなりませんが、土器片は無文土器が多く、時期を特定することが難しいものもあります。それでも磨消縄文や浮線網状文が目立ち、ここが縄文時代後期より晩期にかけての遺跡であることが推測されます。

石器の中に、比較的珍しい「岩版」と称せられるものが１点出土しました。これは、丸い石（縦5.7cm、横5.1cm、厚さ3.1cm）に線刻したものです。この線刻文様が何を意味するか、現在のところ不明です。また、環状磨製石斧（直径5.7cm、厚さ8.5cm）も１点出土しました。いずれも飛騨地方の発掘例としては初めてのことです。その他、縄文時代後晩期の特色を表す独鈷石や石剣も出土しています。

(2)　平安時代の住居跡と墨書土器

縄文時代の遺構は検出できませんでしたが、平安時代後期の住居跡が１軒検出されました。出土遺物は灰釉陶器で、この中には墨で文字の書いてある墨書土器もあり、貴重な資料となります。

奥飛騨山間地でも標高の高い五味原では、当時まだ稲作が困難であったと思われるだけに、どのような生活が営まれていたのか注目されます。

牛垣内遺跡で出土した岩版

トピックス

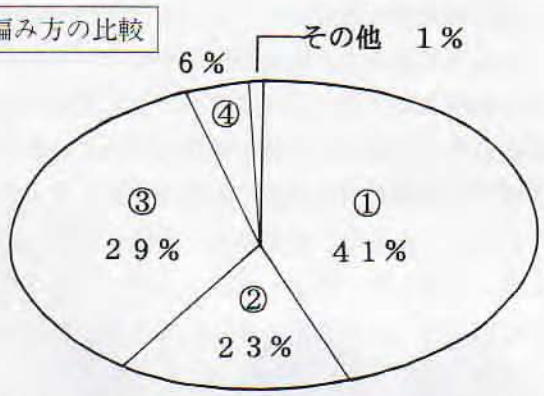
■縄文土器の底に残された編み物の跡

（国府町　荒城神社遺跡）

縄文時代の人々が使用していたと考えられる生活用具には、発掘で多く出土する土器・石器のほかに容器や敷物・衣服等の編み物や織物もあります。しかしこれらの多くは、植物繊維などを材料とし、地中に埋まり腐敗する例がほとんどです。しかしその痕跡が土器に残されることがあります。

平成５年度に発掘した吉城郡国府町の荒城神社遺跡は、縄文中期後半から後期前半（4500年前～3500年前）の竪穴住居跡が４軒確認できた遺跡ですが、950㎡の調査区より約３万点余りの土器が出土しました。これらの土器はほとんどが破片ですが、土器の底にあたる破片をよく見ると、写真のような編み物や布の跡が付いていました。これは、土器を作るときの敷物の表面が押しつけられて残されたもので、出土した土器の底部530個のうち400個で確認できました。縄文時代の人々が編み物や織物の形を土器の裏に偶然記録してくれたわけです。

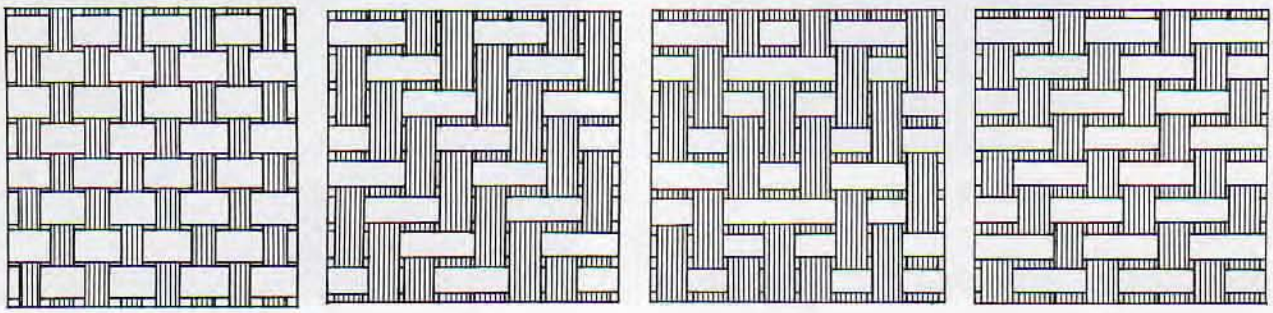
編み方の比較



荒城神社遺跡出土の土器底部からは、７種類の編み方が確認できましたが、多くは図①～④の４種類でした。一番多い編み方は①の編み方で、１本ずつ越えたりもぐったりする平織のものです。また、すき間なくつめて編んだものも、ザルのようにすき間を空けたものなど数種類あります。他の遺跡での報告と比べて、この遺跡での特徴は③の編み方の割合の多いことです。

縦横の１本１本は、幅はすべて５㎜以下で、細いものは１㎜程度の糸状のものもあります。またそれぞれの断面の形は、薄い板状のもの、丸みを持ったものなどが観察でき、さまざまな材料が使われていたことが推測できます。

土器の底に残る編み物の跡の観察により、縄文時代の人々が、布や敷物・カゴ・ムシロ等を日常使用していたことがわかり、その細かで熟練した技術に改めて驚かされます。



①　②　③　④

タイムスリップ探検隊に参加して

当センターでは、８月10・11日の２日間、親子で遺跡の発掘を体験する「第３回タイムスリップ探検隊」を実施しました。

今年度は、岐阜市の長良堀田城之内遺跡で開催しました。堀田城之内遺跡は縄文時代・古墳時代・中世にかけての遺物の散布地と考えられ、昨年度、岐阜市教育委員会が行った隣接地での調査では、古墳時代から白鳳時代にかけての住居跡が多数検出されています。

参加者は当初予定していた定員をはるかに上回る応募があり、県下19市町村の小学校５・６年生と保護者の皆さん46組94名の方が参加されました。

参加された方々は午前中作業員さんとともに、猛暑の中、発掘体験をし、午後は出土した土師器や須恵器片の水洗い・拓本とりを行いました。

参加された２組の隊員の感想を紹介します。

岐阜市立長良東小学校　５年生

タイムスリップ探検隊に参加して、ふだんではなかなかできない遺跡の発掘や拓本とりができました。発掘では、土器の小さなかけらが思った以上に出てきました。でも、大きな物は出てきませんでした。だから、少し大きな物が出てきた時はとてもうれしかったです。２時間はみるみる過ぎていってしまいました。

長良公園へもどり、土器を洗い拓本とりをしました。今まで拓本という言葉はよく聞いたけど、やり方はわからなかったから良い経験でした。それにたくさんきれいにとれました。

今日は、今まで知らなかったことがたくさん分かってとても良かったです。

お母さん

長良に住んでおり、毎日、発掘現場を見て通っていましたが、実際に発掘体験ができて、とても感激しました。

発掘作業の時間はわずかでしたが、それでも時代を一千年以上もさかのぼれるロマンはすばらしいです。発掘作業から拓本どりまで、およそふだんの生活で体験することのできない活動に時間のたつのが惜しくてなりませんでした。子どもだけでなく、私自身が有意義に過ごすことのできた一日でした。

柳津町立柳津小学校　５年生

遺跡の発掘の勉強をして、わかったことやおもしろかったことがたくさんありました。土器を見つける時は、とても楽しくできました。小さな土器のかけらがほとんどで、大きな物は少ししかなかったので、残念でした。土師器とか須恵器など初めて聞く言葉でしたが、勉強になりました。

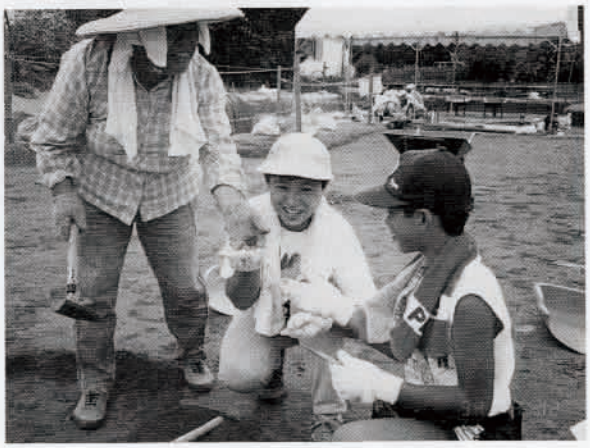
拓本をとるのは、むずかしかったけれど、とてもおもしろかったです。お母さんに手伝ってもらいながら、拓本を七つも作ることができてよかったです。

お母さん

初めての発掘体験で、親子共々、心に残る体験ができ、とても良かったと思います。

発掘した遺物は本当に小さなものばかりでしたが、これが古墳時代のもの、これが鎌倉時代のものと、一つ一つ手にとると、感激します。

博物館などでただ見学するだけのものと比べて、実体験を通して得たこの感動は、とてもすばらしいものだと思いました。そして、古代のことを学ぶ手がかりになりました。



センターだより

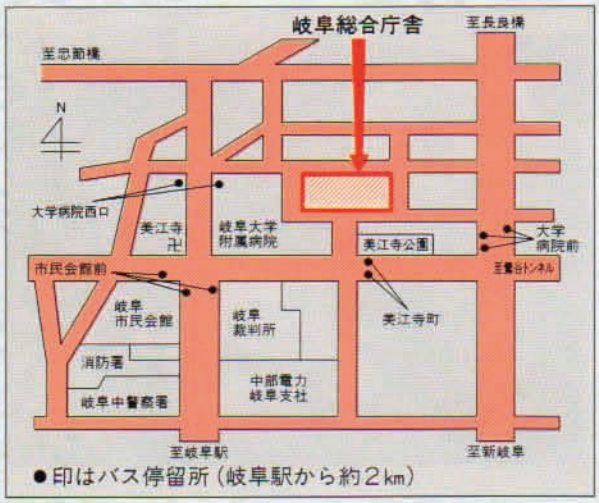
発掘作業風景（大垣市）

■発掘作業に参加して（その5）

遺跡の発掘作業というと、誰もが『夢』『ロマン』などを想像し、この仕事に従事するまでは、私もそのうちの一人でした。しかし、実際、現場に立ってみると、地道な作業の繰り返しだということを痛感しました。また、遺構、遺物などの考古の資料は過去の人間集団の行為の痕跡そのものであって、文献資料などの意図的、選択的に残されたものと違い、客観的な事実をありのままに示すという強みがあるし、信頼できる情報源だと思います。

大垣市内の身近な所で古墳時代から現代に至るまでの遺跡の発掘作業に応募し参加できたことや郷土の歴史を知る好機会を得ることができたことは非常に幸運であり、喜びだと思っています。これからも多くの人々と出会い、楽しく作業ができるように心がけたいと思います。

記録的な猛暑の中での発掘作業は正直いって苦しいです。それを支えてくれるのは氾濫原の下から現われた畦畔などの弥生時代の遺跡でした。さらに強烈だったのは当時の人々の足跡が地表面に点々と浮かび上がってきたことでした。鮮明なものは足の指まで確認できました。これらの足跡は私たちに何を語りかけているのだろうかと思いました。



●日誌

6．16　県教育センター次長奥村氏、今宿遺跡視察
16・17　全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会参加（大阪府）
21　古川町杉崎廃寺調査員河合・北平氏、岡前遺跡視察
23　大垣市産業部長早野氏、今宿遺跡視察
29　日本考古学協会員大江氏、岡前遺跡視察
　岐阜県博物館学芸主事大塚氏来所
7．8　徳山ダム副所長権藤氏他３名来所
10　丹生川村中根地区の皆さん、西田遺跡見学
11　岐阜市堀田城之内遺跡、調査始め式開催
13　多治見市文化財保護センター所長桃井氏他１名、来所
　文化庁記念物課井上氏、飛騨出張所来所
　名古屋見晴台考古資料館村木氏、荒尾南遺跡視察
15　東大阪市文化財協会松田氏、荒尾南遺跡視察
17　飛騨こども考古学会25名、岡前遺跡体験発掘
20　岐阜県文化財審議会会長大野氏、岡前遺跡視察
22　県監査委員事務局井川氏他２名、堀田城之内遺跡視察
25　飛騨考古学会吉朝氏、岡前遺跡視察
26　文化庁文化財調査官士肥氏、本部・穂積整理所来所
28　岩野田歴史を語る会、船山北古墳群見学
8．2　美濃市文化財審議員長瀬氏・同教育委員会高木氏、下巾上遺跡視察
3　縄文土器研究会戸田氏・宮川村教委林氏、岡前遺跡視察
9　藤橋村長・村議会議員12名、寺屋敷遺跡見学
　愛知学院大大参教授、今宿遺跡・荒尾南遺跡指導調査
　杉崎廃寺発掘作業員さん、岡前遺跡視察
10・11　堀田城之内遺跡にて、第３回タイムスリップ探検隊開催
18　西濃教育事務所社会教育課主事15名、上原・寺屋敷遺跡見学
23　揖斐郡池田町議会議員20名、上原・寺屋敷遺跡見学
25　徳山ダム家族の会19名、山手宮前遺跡見学
　長野県埋蔵文化財センター理事神村氏、飛瀬遺跡視察
26　瀬戸市埋蔵文化財センター河合・岡本氏、下巾上遺跡視察
29-31　第２回埋蔵文化財発掘調査基礎講座開催
9．9　美濃市社会教育課課長田内氏他１名来所
16　洞戸村飛瀬遺跡調査納め
18　京都文化博物館鈴木氏、寺屋敷遺跡指導調査
21　東大阪市文化財協会松田氏、寺屋敷遺跡見学
22　三重県立桑名北高教諭山崎・鷲野氏、穂積整理所来訪
28　愛知学院大大参教授、上原遺跡・寺屋敷遺跡指導調査
10．3　静岡大加藤名誉教授、寺屋敷遺跡指導調査
4　愛知学院大大参教授、今宿遺跡指導調査
5　藤橋小中学校42名、徳山上原遺跡体験発掘
6・7　全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会参加（栃木）
8　古川町岡前遺跡現地説明会開催（188名）
12　日本モンキーセンター所長岩本氏、今宿遺跡指導調査
16　大垣市荒尾南遺跡現地説明会開催
27・28　全埋文協中部北陸ブロック法人連絡協議会参加（山梨）

■編集後記

伊藤秋男先生には、お忙しいなか貴重なご提言をいただき、誠にありがとうございました。先生の体験から「古墳の崩壊や遺跡の消滅は意外と早く進行し、このまま放置したら……」には、改めて文化財保護の必要性を痛感しました。

今年の夏は、記録的な猛暑となりました。炎天下での発掘作業の厳しさは、言葉では言い表わせません。しかし、新しい遺構・遺物を発見できた時は、ほんの一時ですが、暑さを忘れさせてくれます。

本号では、低湿地帯に位置する今宿遺跡の水田遺構や荒尾南遺跡の木製農具などの発掘状況を紹介しました。このような低湿地における大規模な発掘調査は、県下では初めてのことです。さらに調査・整理作業を進め、弥生時代、古墳時代の水田耕作のようすを解明する手がかりが得られるよう努力してまいります。